

バーナード・マラマッドの愛の理想

The Concept Of Ideal Love As Seen Through Barnard Malamud

木下高徳

要 旨

人間を愛する能力(忍耐・勇気・規律)を身につけた人の愛は、相手を尊敬し、相手の精神的な成長に関心をもち、配慮して、相手が相手の望むがままの方法で成長しようとするのを、最大の努力をもってアシストするという形をとることになる。このような人間にすべての人間が成長し、人間同志がお互いにアシスタント⇔アシスタントの関係を確立できるようになったときはじめて、この世界から暴力、人種差別、人間疎外をなくすことができ、真のユートピアをうち建てることのできるものであり、富や地位の獲得によってユートピアを招来することはできないのである、とマラマッドは『アシスタント』で説いている。

Key Words: Malamud, Love, Jew, Assistant, Discrimination, Fransis, Frank, Helen, Utopia.

I

外国人や異教徒を眺め、その言動を判断するに際しては、客観的な判断が欠如するという傾向をすべての人間が露呈するのは、歴史が示しているところである。人間は異民族や異教徒の習慣や言動を、ただ自分たちのそれらとは異っているというだけの理由で、野蛮で、残酷で、非道德的だとの判断を下してきたのであり、現在も下しているのである。異民族や異教徒のすべての言動や慣習が自分たちの固執している偏狭な規準によって裁かれ、たとえ善なる行為であっても、非道德的な悪魔的行為とされるのである。しかしながら、自分たちの悪行や愚行は、道德的目標に達するためのものだと口実によって正当化するのである。

ニューヨークへと亡命してきたユダヤ一世とその子供であるユダヤ二世で大部分の登場人物を構成しているマラマッドの『アシスタント』がこの人種差別という問題をテーマのひとつとして扱うことになるのは当然であるが、異民族間・異教徒間には、このような客観性を欠いたナルシズム的な歪曲が存在するという現実には、マラマッドはこの小説でくどいほど言及している。

登場人物たちに負わせた差別意識を、彼らの日常の言動の中や意識の領域で行なう自問自答の中に描出するのは常套手段のひとつであろうが、この小説ではさらに、登場人物たちが他の存在に対して吐き散らし、あびせる、ののしりや悪口によって、人間の無意識に隠れ潜む差別的偏見までも暴き出そうとしている。

アイダは、客観性を欠いたナルシズム的な歪曲の深い井戸に浸かって、外の世界を客観視できない、カエルのような存在としての役割が与えられている人間である。

彼女はフランクが自分の家にいることで、つねに歴史の教訓より最悪の結果の到来のみを予想し、夜も眠れないほどの不安の中に住むことになる。彼女の目には、フランクの行動はすべて悪魔的であって、警戒し、拒絶すべき行為と映るのである。したがって、フランクに愛や理解を示そうとするモリスやヘレンの態度を、危険への接近とみなして警告し、危険の対象を追放するよう強硬に主張しつづけることになる。だが低次の段階にいるときのフランクの悪行を、彼女がわずかにではあるが洞察しているのは一種のアイロニーであるといえる。

アイダはステレオタイプのユダヤ人である。娘ヘレンを異教徒フランクから隔離しておこうとする彼女の躍起の努力が、むしろヘレンの飢えた孤独な心に逆の効果を与えずかではあっても及ぼす結果となるのも、ひとつの常套的なアイロニーである。娘のあとをつけるという、彼女の頑強なへ内なるゲットー¹より発した愚行によって、娘がフランクと逢引しているのを知り、「どうして異教徒なんかと接吻^{キス}できるのかねえ」と詰問するが、こういう差別の言葉が母親の口からくり返されれば、子供の心に大きな影を投げかけつづけないわけがない。

アイダは民族の過去への密着があるだけで、自らの生きる時代や時代的情況を判断するための柔軟な思考形式や能力がまったく与えられてい

ない人物である。したがって、彼女は反省をしたり、自らと他人を客観的に眺めたりする能力を欠いた、ナルシズム的人間として描かれていることになる。彼女は異民族同志が好ましい関係を確立するのを阻害する、ユダヤ人側の代表の一人としての役割を、作品の中で負わされていることになる。

彼女も一見、人を愛する資質をもっているように見える。だがそれは、ひとつは自分の娘に対する母親としての愛著であり、他は自らの肉体的生命の維持に必要な糧を与えてくれる、夫という存在に対しての利己的な愛に過ぎない。真の愛の能力を所有し得た人間は、家族や自らの利益となる人間だけではなく、すべての人間を愛することができる人間をいうのだ、というマラマッドの思想から彼女は大きく脱落していることになる。彼女はナルシズムを脱却できるほどに精神が発達していない人物とされ、したがって反省の上に立つ客観的な視点と理性が未発達な段階に、それも最低次の段階に留まっている人物の代表として描かれるのである。だがこう言ったからといって、作者はアイダを、ユダヤ人のまれな、少数グループの代表として登場させているのではない。アイダこそ大多数のユダヤ人を代表する人物だといっているのである。

こういう人間の差別意識からの脱却は、もしその人間が若くなければとくに、ほとんど不可能と言えよう。だがマラマッドは、まったく悲観的になっっているわけではないようだ。へ聖フランシスの愛をもつてすればどうであろうかとの疑問を、小説の最後で読者に残しているのである。

モリスの「内なるゲットー」の壁は、彼が善を指向する性格と人を愛する資質をもつ人物であるがゆえに、風穴の空きやすい、決壊しやすい、脆いところをもつものである、と描かれるのは当然である。この小説に登場するユダヤ人のなかで、あるいは少なくともユダヤ一世のなかで、モリスが最も容易にくずれやすい「内なるゲットー」を所有する人物であるのは、聖人のもつ資質のいくつかを授けられた登場人物として当然であろう。だがこう言ったからと言って、「ドイツ人からは何の恩恵も受けたくない」⁽²⁾などと考えたりするモリスが、「内なるゲットー」を構築していないと言うのではない。高い壁を構築してはいるのだが、くずれやすい箇所をもつ壁だと描かれていて、このように壁を崩壊させやすくしている原因はモリスの所有する愛の能力に内包され、それと共存しているものだ⁽³⁾と作者は言うのである。

アイダと共にモリスは（へレンさえもが）「自分の店が以前より繁盛しはじめたのは、フランクが魔術師であるからではなく、彼がユダヤ人ではないからだ」⁽³⁾と確信する。しかし作者は、確かに店が以前より繁盛しはじめた理由の一部は、フランクの存在によるものだとはいはいるが、それをフランクがユダヤ人でないからだ、と理由づけしてはいない。作者はもちろんここで、ユダヤ人が共通して所有する「内なるゲットー」の内部風景を描いて見せているのだが、同時に店が繁盛しはじめた理由として、モリスの持たぬフランクの生産的な活動へと向かう能力を挙げているのである。したがって作者は、この生産的な活動へと向かう

資質を、愛の能力を持つ者に付随する資質、あるいは愛の能力より発する活動と思考していることになる。

モリスは作品の中でフランクとは逆方向に向かう人間、つまり退行していく人間だと前述（前号で）したが、モリスは作者が理想とする愛を所有する人間に近い存在から、作品の進行につれ退行していくにしたがって、避難所でもある自らの「内なるゲットー」の中に逃げ込まざるをえなくなり、したがってフランクに対する愛と憐れみとからも遠ざかっていくことになり、フランクと別れざるをえなくなる状況に追い込まれることになる、と描かれる。

作品の最初の部分でのフランクのもつ「内なるゲットー」もまたひとつの典型を代表するものといえる。

Ward sat down and told him that it was a Jew he planned to rob, so
Frank agreed to go with him.⁽⁴⁾

フランクはそれまでユダヤ人とは直接交わったことはなく、したがってユダヤ民族に対して何の知識も所有しては、ただ世間の風潮や噂話によって自らの内部に形成された差別意識にてらしただけでよしとして、強盗に同意した、とあとになって告白しているが、作者はこう説明することにより、フランクに「内なるゲットー」を所有する人間のひとつの典型を代表させている。

彼の所有する「内なるゲットー」がいかなるものであるかは、他にもとくに小説のはじめの部分に、ひんばんに描かれている。たとえば、ヘレンに心ひかれはじめたとき、「彼女はユダヤ人には似ていないな、これはありがたいことだ」とフランクが思う場面などは、そのひとつである。しかしフランクの「内なるゲットー」は、強靱なものではなく、単なる無知より発しているものだ、と作者は言っていることは確かだ。

「これほど近くでユダヤ人たちと暮らしたことがそれまでなかった自身にある種の嫌悪を感じ」⁽⁵⁾「ぼくが強盗に押し入ったのは彼がユダヤ人だったからだ、ユダヤ人にならんことをしてもよいと考えるなんて、一体ぼくにとってユダヤ人とは何なのだろう」⁽⁷⁾という疑問を抱いたフランクが、その後、ユダヤ人を観察し、さらにはユダヤ人に関する書物や旧約聖書を読んだりしつつ、ユダヤ人への理解を深めていくさまが描かれるからだ。

フランクのこの動機の根底には、愛するヘレンのことを理解したいという彼の欲求が描かれているのだが、ここには真の愛においては相手の真の姿を知りたいという欲求が存在するものだという、作者の思想が表白されていることになる。そこから、愛によってのみ「内なるゲットー」の倒壊は可能なのだ、というマラマッドの思想に至るのだが、それは後の節で証明することになる本拙論の結論のひとつを成すものである。

実際、フランクは「内なるゲットー」を強盗という悪業に踏み込む引き金にした人物であるが、しかし最も倒壊しやすい「内なるゲットー」

をもつ人物として描かれていることになる。小説のはじめで、ユダヤ人モリス一家のところに住み込むという行為そのものも、彼の「内なるゲットー」が頑丈なものでない証左として描かれているのであろう。念願かなったヘレンとのデートも二回目になると、フランクはすでに観察によって得た知識をもとに、ユダヤ人に対する自らの差別意識を払拭するのにほとんど成功してしまっていると言える。

As they were approaching the movie theater, a thought of her mother crossed her mind and she heard herself say, 'Don't forget I'm Jewish.'
 (8)
 'So What?' Frank said.

この小説の中でただ一人フランクだけが、自らの「内なるゲットー」を完全に破壊した人物となっているのである。

II

ヘレンとフランクの愛の推移は、実際のところ、自らの「内なるゲットー」の守り手としてのヘレンと、ヘレンの「内なるゲットー」の崩壊を目くろむフランクとのあいだの攻防の過程とも言えるものである。

ヘレンは一見、フランク以上に民族的差別意識に縛られていないように表面上は描かれている。ヘレンの差別意識はただ単に、母親アイダと父親モリスを一人娘として傷つけないというのが、ただひとつの動

因であるにすぎないと、自身でも言い、信じてもいるようだ。だが彼女の言動をたどると、多くの矛盾が発見されるよう作者は描いている。これらの矛盾は、アメリカ生まれのユダヤ二世であるヘレンでさえも、強靱な「内なるゲットー」を構築・固守しているのだ、と考えることによつてはじめて解決できるもので、そう考えると、作者の意図は容易に解ける。彼女もまたユダヤ人のひとつの典型タイプを代表しているのは、当然であろう。

フランクとの関係において、その最初から、ヘレンが逃れようもなく感じてしまうのは「極度のいらだち」であり「不信心」である。

Helen felt for him, as they walked, an irritation bordering on something worse.
 (9)

これはフランクとヘレンがはじめて、二人並んで歩きながら、言葉を交わすに至った場面である。彼女は自分が感じる「いらだち」は、母親にその原因がある——異教徒は誰でも定式的に危険な人間と決めつけてしまう母親にある——と考える。だがその後、ヘレンは自分がフランクを愛しはじめていると感じるに至るようになって、「彼女はあのつぶれた鼻をしたよそ者に対してずっと感じてきた不信心と戦うが、成功はしない」⁽¹⁰⁾のである。はじめて接吻キスを交わすに至って、自らもそれを欲しているのに、「この上なく甘美な瞬間に、彼女はまたも不信心が一種の

病氣のように自分に取り憑いているのを感じる」⁽¹¹⁾のである。こうして彼女は、ナットには簡単に処女を与えたにもかかわらず、「本当に自分があなたを愛しているとわかるまではだめよ」⁽¹²⁾と、フランクとは肉體関係に入るのを拒む。ヘレンがフランクを本当に愛しているのは確かなのだが、ユダヤ人以外の男性との結婚など考えたこともない彼女の心には、彼女自身でも意識していない解決しがたい葛藤があり、それとの話し合いをつけなくては、彼女はフランクとの関係において、それ以上進めない、と描かれるのである。

ヘレンは、自分がフランクをすっかり受け入れることができない「罪は自分にある」⁽¹³⁾と分かりながらも、自分がなぜ、何が原因でそうできないか、作者はヘレンにその原因までは突き止めさせてはいない。ナットにはあれほど易やすと処女を与え、ナットとは人生において求めるものが違っている、つまり一緒に暮らす人間ではないと決断を下しているにもかかわらず、寂しさを感じるとナットからの連絡を待ち望ませ、もしナットが連絡をくれたら再びあの行為をくり返すだろうと自覚しながらも連絡を待つ——その理由はただひとつ、ナットがユダヤ人であるからだ——彼女が、愛しているフランクとは接吻を交わしただけで神経が痛む理由を、作者は彼女に理解させないでいる。彼女のナットに対して感じていた憧れは、フランクの出現によって完全に消滅させられ、フランクへの愛が大きくふくれて、フランクがユダヤ人でないという壁を、彼との結婚に踏み切る決意を阻止する壁を、自らの頭の中で乗り越えさせざる——

she had never imagined she would marry anybody but a Jew. But she had recently come to think that in such unhappy times——when the odds were so high against personal happiness——to find love was miraculous, and to fulfill it as best two people could was what really mattered. Was it more important to insist a man's religious beliefs be exactly hers (if it was a question of religion), or that the two of them have in common ideals, a desire to keep love in their lives, and to preserve in every possible way what was best in themselves? The less difference among people, the better...⁽¹⁴⁾

ヘレンは「このようにこの問題を自分自身のためには解決したが、両親のためにはまだ解決できていないと不満を感じる」⁽¹⁵⁾という地点まで進んだように表面的には描かれてはいるが、彼女は果たして、自分自身に対してフランクと結婚するための最大の障碍を乗り越えられたと作者は言っているであろうか？ 決してそうは言っていない。こう考えたすぐあとで、「彼女は自分の子供たちは、いつの日かユダヤ人と結婚してほしいと願わずにはいられない」⁽¹⁶⁾という描写につづくのである。したがって以後も、彼女は自らを納得させようとのむなししい努力を、果てしなく続けざるをえないことになる。

——how could it in times like these? How could anything be important but love and fulfillment? It had lately come to her that her worry he

was a gentile was less for her own sake than for her mother and
 (17)
 father.

このようにヘレンがフランクに対して不信感や不快感を払拭できず、男女の関係に入るのを拒み、自らを説得しようと苦しむ描写のくり返しは、いずれ起こる二人の関係におけるクライマックスの伏線ともなっている。ヘレンは自由の国アメリカで生まれ育った人間として、たとえ自分はユダヤ人を両親としてはいても、両親のように差別意識はもつべきではないし、またもつてはならない、と考えている人間である。だがこういふ彼女の異教徒との愛の関係における心の葛藤を描くことによつて、マラマッドは、たとえ自由の国アメリカで生まれ育つても、すべてのユダヤ人の内面には、長く迫害されつづけた歴史が築き上げた「内なるゲットー」が引き継がれているという現実、およびそれを崩壊させることの困難さを語っていることになる。実際、マラマッドはヘレンと同じユダヤ系二世である。マラマッドは、自らの「内なるゲットー」の強靱さを、ヘレンに負わせて描いていると言えなくもない。

アイダのように「内なるゲットー」の壁を高く、頑丈に張りめぐらし、その中に住みつづけている人間には、ヘレンのような心の葛藤は生じはしない。つねにゲットーの壁の内に留まろうとするがゆえに、壁に守られているからである。だがヘレンのように、自分は「内なるゲットー」など築いてはいないし、また築くべきではないと考えている人間こそ、人生の重大事を行なおうとするとき、処理できぬほどの大きな不安や恐

怖の中に投げ込まれることになり、懊悩させられることになりかねぬのだ、と作者は言うのであろう。

こうして作者は、ヘレンに、まことに徐々にではあるが、自分が本当にフランクを愛していると悟らせ、フランクにそのことを告げさせる地点にまで到達させる。しかし作者は、この地点にこの小説の大きなクライマックスのひとつを、暗い愛と憎しみの穴の底を明かるく照らして覗かせる一瞬を用意している――

Afterward, she cried, 'Dog!——uncircumsised Dog!'

(18)

フランクのヘレンとのこの小説での唯一の肉体的結合は、一部の評論家が述べるようなレイプでは決してない。レイプだとの考えは、その後、ヘレンがフランクに向ける憎しみの源の所在を見誤つた結果であろう。ヘレンは、前述したごとく、フランクを本当に愛していると確信できるまでは、彼とは寝ないと言いつづけてきたが、このときは、「今こそフランクを愛していると分かったという事実、フランクが聞きたいと待ち望んでいた重要な事実を告げにきた」⁽¹⁹⁾場面であるのだ。

She held him tightly with both arms, weeping, laughing, murmuring
 (20)
 she had come to tell him she loved him.

たとえその直前にウォード・ミノークに犯されそうになるという事件

があったとしても、それは彼女をウォードから救い出してくれた彼女の真に愛するフランクとの行為に対しての大きな抵抗とはなり得ないはずであろう。むしろ、一歩手前まで行った不潔な暴力的攻撃に対する浄化の行為とも成りうる行為であろう——と言うのは言い過ぎであろうか？
 彼女は、依然として、言葉でささやかな抵抗を見せてはいるようである

“Please not now, darling.”⁽²¹⁾

しかしこれは完全なる拒絶の言葉というよりは、肯定の言葉に近いと考えるべきであろう。少なくとも、彼女があれほどの憎しみを以後フランクに向けるほどの、拒絶の言葉からは遠く隔った言葉であって、むしろそれ以後の彼女のフランクに向ける燃える憎悪こそ異常だ、と受けとるべきなのであろう。

ののしりというのは、それを発した人間の心の中を一瞬、明かるく露呈してみせる火花である。ウォード・ミノグがしばしば投げつける「ユダヤの糞つたれ野郎」⁽²²⁾ というののしりには、ウォードの心に巣くう差別意識が明滅する。モリスが自分の店に対して吐きつけるののしりは、彼が店を愛してはいず、憎んでいる事実を露呈し、彼が職業の選択に失敗したことまでを暴き出して見せている。ナットの「このあばずれ」⁽²³⁾ というヘレンに対するののしりには、彼の女性蔑視の心のありようが、自

分に必要だから相手の女を愛するのであって、愛するがゆえに彼女が必要であるという、作家の理想と逆のナルシズムの性向に充ちたナットの内面を覗かせているのである。

同様に、「犬め！——割礼をしていない犬め！」⁽¹⁸⁾ というヘレンののしりに、作者は彼女の心の奥底にそびえる「内なるゲットー」の存在の大きさを浮かび上がらせているのである。彼女のこの小説の中での矛盾した言動はすべて、彼女の「内なるゲットー」の存在によるものだと、作者は描いていることになる。そう考えれば、彼女ののしりも、彼女の以後のフランクへの巨大な憎しみも、彼女が自らの「内なるゲットー」へと完全に退却したことに原因があると理解できる。

小説の終り近くで、作者はヘレンに自らの内面をわずかにではあるが、正視しようとする機会を与えている——

Although she detested the memory of her experience in the park, lately it had come back to her how she had desired that night to give herself to Frank, and might have if Wark hadn't touched her. She had wanted him. ... She had hated him, she thought, to divert hatred from herself.⁽²⁴⁾

フランクへの愛によって、わずかにくずれかける兆候を見せていた彼女の「内なるゲットー」は、ウォード・ミノグの攻撃によって、頑丈な補強がなされるに至ったのだが、フランクはその直後にそれを押し

破ったがために、壁の外へとはじき返されたことになる、というのであろう。彼女が憎しみの牢獄より救い出され、彼が愛の迷路より解放される道は、ただひとつしかない——彼がユダヤ人になることである、割礼を受けることによって——というのであろう。

数千年にわたる苛酷な迫害の中を生きてきたユダヤ人の（内なるゲト）は、かくも巨大で、強固な存在となつてしまい、ユダヤ人が自らをそこから解放するのは、非ユダヤ人が自らを自らの（内なるゲト）より解放することよりはるかに困難で、したがってまず非ユダヤ人が自らの差別意識を払拭してからユダヤ人に対して救出の手を伸ばしてくれないかぎり不可能なのだ、というのであろうか。自分の民族を迫害しつづけた他民族に対して、マラマッドは、フランクを通して罪の償いと救出のための援助を叫んでいるのであろうか。いずれにしても、作者はユダヤ人のうらみと憎しみの巨大さを暴いて見せていることとなる。ここにおいてこの小説は、人種差別を扱った小説の系譜に属するもののひとつともなっている。

Ⅲ

マラマッドが愛のテーマを、いかに愛されるかではなく、いかに愛するかという問題としてとらえていることは言うまでもない。この小説においてマラマッドは、愛とは一人の異性に会ったときに、その相手に飢えたように惹かれ、どうしようもなく陥ち込んでしまう恋の問題として表現しているのではなく、いかに愛すべきか、いかに愛は持続させる

べきものなのか、さらにそれを可能にするためには各個人はどう成長しなければならぬか、という問題としてとらえ、それへの解答を提出しようとしているのである。

フランクが自分に欠けていた、人を愛するための能力——忍耐・規律・勇氣——を獲得していくさまを、作者がどう描いているかについてはすでに（前号で）述べたし、フランクの所有する資質（良心）を、作者がいかに重要視しているかについても合わせて説明した。ではこういう資質を所有する人間がそれらの能力を発達させたとき、その人間の愛はいかなる形をとって表現されるべきものだとマラマッドは考えているのであろうか。

交換価値を最重要視する現代社会において、最良の相手と見えるナット・パールを、なぜヘレンに拒否させているのであろうか？ その理由のひとつを、ナットには相手の人間に対する尊敬がない、とヘレンに説明させている。

She had wanted, admittedly, satisfaction, but more than that——respect for the giver of what she had to give, had hoped desire would become more than just that. She wanted, simply, a future in love.⁽²⁵⁾

相手に対する尊敬のない愛は、与える愛ではなく、ただ利己的に奪う愛に堕ちてしまう、つまりただ肉体的欲望の解放のみの交合となつてしま

い、そこには愛の持続も、愛を通じてのお互いの成長も発達もないというのであり、愛における未来が展^ひらけてこないというのである。ナットは学問においては優秀で、成功の階段を着々と登りつつある若者であるが――

He was cordial but as usual held back something——his future. ⁽²⁶⁾

とヘレンはさらに見抜き、つまり彼の性格が搾取的であり、したがって彼の愛は、相手が自分にとって必要だから愛するのであり、自分が愛するがゆえに相手が必要なのだ、という愛ではないということを、さらにはそのため彼の愛には愛の持続も愛における未来もないことを覚るのである。現代の価値感では最良の結婚相手であるハンサムで利口なナットをヘレンにこう批判させることで、作者は、現代の潮流に警告を発していることになるのだが、それはさらに親の稼いだ金で不自由のない暮らしをしているもう一人の金持の若い候補者、ルイスをもヘレンに拒絶させることで、物質の所有とその交換を第一義とする結婚および愛の形態を、偽の愛として提示していることにもなる。

しかるにヘレンは、苦境の中で読書にふけるフランクの姿をたびたび目撃し、「そのことで彼を尊敬する」⁽²⁷⁾と、彼への尊敬から彼女の彼に対する愛が芽吹くさまが描かれる。

真の愛を所有する人間より必然的ににじみ出る心の現れを、作者は、

フランクの愛がナルシズムの愛より真の愛へと成長していく過程を描く場面でくり返し提示してみせる。それは相手への関心と配慮である。この二つは対をなしたもので、一方だけでは完全とはならない。ナットのように相手の肉体への関心のみ留まっているのは、真の愛ではなく、ナルシズムの段階を克服していない愛、つまり偽愛だと言っているのである。

ナルシズムの愛の究極の形は、レイプであろう。作者はウォード・ミノーグにこの究極の形での偽愛をヘレンに対して仕掛けさせることによって一方の極端を、聖フランシスへと自己変革をとげたフランクによって他の一方の極端を、示すことによって、他の人物たちの愛の段階を位置づけているのである。彼らのナルシズムの愛には、相手の肉体への関心のみで、尊敬より生ずる相手への配慮を欠いているがゆえに、彼らは愛の段階の低い位置に留まっているのである。植物を愛するので種を播いたからといって、水や肥料をやるのを怠る人は、真に植物を愛してはいないと言うのである。愛するということは相手の生命と成長に積極的に関与しようとする人生態度であり、したがって相手への関心と配慮が必要不可欠となってくるのである。ここから、愛の本質は何かを育てはぐくむべく、愛する相手のために一心に努力し、働らくことにある、というマラマッドの思想へと導かれることになる。

フランクと交際するようになったヘレンは、「知れば知るほどさらに知りたいと欲し、このようにして自分自身と他の人たちに対して価値のある人間に彼が成長していく姿」⁽²⁸⁾を夢みる。こうして時が過ぎ、彼女の愛によって上昇していくフランクを見て、「自分が彼を変えたのだと

覚って感動し」⁽²⁹⁾「彼を変えることで自分も変わったのだと考える」⁽³⁰⁾に至るのである。

相手が花や木などの植物あるいは自分の子供の場合は、配慮は主として相手の肉体的な欲求に対して重きが置かれるが、人間の大人の場合は、それは主として相手の精神的な欲求に対する関心と配慮となるということとを、フランクとヘレンの関係において作者は示している。

And if she married Frank, her first job would be to help him realize his wish to be somebody. Nat Pearl wanted to be "somebody", but to him meant making money to lead the life of some of his well-to-do friends at law school. Frank, on the other hand, was struggling to realize himself as a person, a more worthwhile ambition.⁽³¹⁾

フランクを愛するようになったヘレンが、大学へ入って勉強をしたいという彼をアシストしようとする考えの中に、また実際にヘレンが大学に通うのを必死にアシストする小説の後半部でのフランクの努力の中に、相手の精神的な欲求に対する関心と配慮こそ、真の愛を構成する土台であるとの思想が示されている。

相手の精神的欲求への関心と配慮が、相手の成長の望みへの関心と配慮がなければ、二人の人間の関係は所有・支配の関係に墜ちてしまう例を、マラマッドはこの小説に書き込んで対比させているわけだが、フランクとヘレンの関係においてはフランクにヘレンに対する一切の非難・

批判・ののしりを禁じることで、フランクを相手の精神的欲求である人間の成長を最重要視する人物に仕立てている。こうして作者は、ヘレンがヘレン自身のために、ヘレン自身のやり方で精神的に成長することをフランクに当然のことと受け取らせ、また彼にそれを何よりも尊いものとしてアシストさせている。ここに作者は、独立した人格の融合こそ真の愛である、という古くもあり、新しくもある理論を再提出しているのである。自らが利用する対象としてでなく、また自らが自らだけのために必要な対象であるから相手と融合するのではなく、お互いに搾取することなしに独立した自由な存在としての融合こそ、真の愛だと提示するのである。

フランクがヘレンに限りない尊敬の念を抱いていることは、あれほどの爆発する憎悪の言葉を浴びせられても、ヘレンに対して一切の批判をしないことによっても示されているが、相手への尊敬なしにはこういう融合の実現は不可能だと言うのであり、前述の愛における重要な要素である相手の人格への尊敬を、からませているのである。

たとえ「犬めノ——割礼をしていない犬めノ」⁽¹⁸⁾とヘレンよりののしられようと、フランクは彼女を批判・非難しないどころか、むしろこれらの罵声を通してヘレンをさらに深く知ろうとする。こうしてフランクにヘレン自身でさえも理解できないでいるヘレンの内面をも理解させる地点にまで、作者はフランクを到達させる。小説の最後でフランクが自ら割礼を受ける行為は、ヘレンの内面に隠れた「内なるゲッター」の存在を理解したフランクによる、ヘレン救済のための最も効果的な手段であ

り、フランクがヘレンを理解した上でなすヘレン救済を可能にする唯一の（愛による）行為である、と描いているのである。

ここに真の愛に不可欠なもうひとつの要素が明らかにされている——
相手を正しく知り、理解する、という。

フランクはヘレンの姿をはじめて見て以来「彼女を知りたいという欲求がつのつていった⁽³²⁾」と、作者はフランクの恋のはじまりを、相手を知りたいという欲求よりはじまると表現している。それにつづいて作者は、まだヘレンと話を交わしたこともないフランクにヘレンの心の中を透視させている——

He got the feeling that she wanted something big out of life, and this
⁽³³⁾
scared him.

フランクのこの洞察は、ヘレンがルイスに言う言葉と共鳴している——

'I want a larger and better life. I want the return of my possibilities.'
⁽³⁴⁾

ヘレンのいう「もっとも大きな、もっとよい人生」とは彼女にとって具体的にどういう人生を言うのか、質問の形でルイスに答えている——

'But what if she wanted to make herself a better person, have bigger

ideas, live a more worthwhile life?'
⁽³⁵⁾

この小説における、愛する対象に向ける愛する者による洞察は、〈恋は盲目〉という一般的な常識とは逆であるが、このようにヘレンの人生の目的と価値を透視することによって、フランクが、ヘレンの理想にかなうよう、自らの墮落した生き方に対して軌道修正を行なうための反省にひたる頻度は増していく。

ヘレンのフランクという人格に対する洞察をも、作者は鋭いものにしていく。高次の段階と低次の段階を昇降する宙ぶらりんのフランクを、ヘレンに「彼はときとして、実際より大きな人間に、またときとしては実際より小さな人間に見えた⁽³⁶⁾」と観破させている。ヘレンに愛を感じはじめたときのフランクはまことに矛盾した存在である。強盗と聖フランシスとの中間に、搾取る者と与える者との中間に、宙吊りになっている存在、つまり過去の悪事の一切を告白し、正道に立ち返ろうとしながらもそうできず、盗みを重ねつつある存在である。その内面を前記のごとく「ときとして……」という表現でヘレンに鋭く透視させているのである。

'I like to know why people tick. I like to know the reason they do the things they do...'
⁽³⁷⁾

これはフランクが自分が読書に励む理由をヘレンに説明した文章である。

高等教育を受けるといふことを、この小説においても人間にとって重要なことと位置づけているマラマッドは、人間が人間を知ることによって正しい方向に向かって自己変革を行なえるようになることを、教育の最大の目的と考えているようである。教育への渴望は、人間が生まれながらに所有する欲望である、とさえ言っているようである。しかしナット・パールという、勉強によって知識を増やしたとて優れた人間とはなれない人間を描き、それと対比してフランクという未だ高等教育は受けていなくとも、洞察力に富み、真正なる愛をもちうる優れた人格に成長していく人間を描くことで、知識の超越と知識によって歪められた人間の内面の修正の可能性を、作者は思考していることになる。したがって、愛にあふれた状態こそ、自らと他の、人間としての本質を見定めうる最高の状態であるとの思想を説いていることになる。そう考えれば、この小説におけるフランクとヘレンのただ一度の肉体的交合の場面に、ヘレン自身でさえ認識できずにいた彼女の内面をフランクに理解させ、またフランク自身にも自らのナルシズム的性向を認識させる役目を、このクライマックスの場面に負わせて描いたのは、作者の優れた構成上の技巧といえる。

マラマッドは、愛における肉体的融合を最重要視してはいない。理論家の役目を負わされているヘレンの考えの中にそれは説明されている——まず精神的な愛を育て、それから肉体的な行為へと進む、という。肉体による合歡は愛の一表現に過ぎず、相手への尊敬と関心と配慮と理解への絶えざる意識の覚醒と、こうして相手の中にも愛を創造しようとする

の自らの人間存在としての至高のあり方を、愛と呼んでいるのである。肉体的合一は、そういう愛の海の無数の波の各頂点に過ぎないもので、波を作り出す無限の深みの総量を、つまり一人の人間の全能力・全存在・全生きざまを、愛と呼んでいることになる。作者は厳しく、遠い理想を提唱しているのである。

IV

ヘレンには小説の終盤において、小説の主テーマに系わる最も重要な作者の主張を洞察する役割が与えられている——フランクの完全なる変身という。

自分の内面に巢食う異教徒への憎しみによって視力が曇らされているヘレンにとってはとくに、フランクの聖人への変身を理解するのは容易ではない。とくに理解しかけた瞬間に、父親を襲った強盗の片われだつたとの告白を聞かされたとしたら、不可能というべきであろう。だがこの小説の構想とテーマから、ヘレン以外にフランクの聖人への自己変革を理解させるべき人間を作者は他に登場させてはいない。

物語の最初から、フランクが悪事を重ねながらもつねに聖フランシスの面影を帯びた人間であることを読者に印象づけるために、作者はフランクを聖フランシスと二重写しにした描写をしている——両者共に粗末な服を着て、細面で、濃いあご髭をたくわえていて、鳥が身体の上に舞い降りてとまる。やがて薫陶と鍛練の時間が過ぎて、愛の聖人へと完全なる変身を遂げたフランクに、「ものごとは変わるものだよ。ぼくは昔

のぼくとは違うんだよ」⁽³⁸⁾とヘレンに向かって言わせるが、ヘレン同様の変身を、人間の性格は大人になってからでは変革不可能なものだ、と考えている一般の読者に理解させるのは困難な作業となる。当然、ヘレンを通してこれがなされるわけだが、ヘレンにフランクの昼夜の労働によって自分が夜学の大学に通うことが可能となると覚らせる場面、つまり給仕人としての彼の夜のアルバイトの疲れ果てた姿を目撃させて、ヘレンにフランクの変身をはっきりと覚らせる場面が描かれることになる。

It came to her that he had changed. It's true, he's not the same man, she said to herself. I should have known by now. She had despised him for the evil he had done, without understanding the why or aftermath, or admitting there could be an end to the bad and a beginning of good.⁽³⁹⁾

フランクが変身を遂げたのだ、という彼女の発見の描写は、ここだけでは終わらない。作者は自分の大きな主張を読者に理解してもらうために、フランクの変身を何度もヘレンに意識させることになる。

It was a strange thing about people—they could look the same but be different. He had been one thing, low, dirty, but because of something in himself—something she couldn't define, a memory

perhaps, an ideal he might have forgotten and then remembered——⁽⁴⁰⁾
he had changed into somebody else, no longer what he had been.

Somethingとは人間のもつ良心のことを、memoryとはたとえば聖フランシスのような偉人憧憬のことを、idealとは真の愛に生きたいとの理想のことを作者は指しているであろう。

こうして次には、ヘレンが自らの「内なるゲットー」の壁の外へと久しぶりに顔を覗かせ、フランクに贈られた本を今も持ち歩いている、と感謝を告げる場面が描かれる。しかし作者はヘレンを自らの「内なるゲットー」の壁の外に連れ出してはいない。「あなたは私たちに何の負い目もないのよ」⁽⁴¹⁾とフランクに向かってヘレンに言わせることで、ヘレンがフランクの過去のすべてを許したことが描かれ、次にヘレンがナットときっぱりと訣別する場面がつづく。これらヘレンに関する最後の場面に、作者はヘレンの以後の大幅な変身を予想させていることになる。

V

真の愛が内的な活動であり、したがって生産的な方向への自らの能力の使用だとマラマッドが考えている事実は、完全なる自己変革を遂げたフランクの考えと、自らの能力を極限にまで実現しようとする彼の努力する姿の中に描かれる——

All he asked for himself was the privilege of giving her something

she couldn't give back. ⁽⁴²⁾

愛が内的な活動だとすれば、(例えばルイスのような) 怠惰な性格は、この活動にブレーキをかけているものだということになる。生産的な方向への自らの能力の使用を怠っていることになる。フランクの愛は、こういう怠惰を完全に脱却したものとなっている。作者はフランクに、愛するヘレンへ関心を、彼女の成長と理想の達成への関心を、絶えることなく向けさせ、彼女がそれを実現できるよう専心努力をさせている。

He figured the best thing he could do was help her get the college education she had always wanted. ⁽⁴³⁾

こうして作者は、フランクに、食料品店で自ら新しい料理を工夫して売り出させたりして店をより繁盛させる方向に向かって努力させたり、閉店後も徹夜で、コーヒーポットでアルバイトをしながらヘレンの成長と願望の達成を完成させるため、自らの生産的な能力を極限にまで発揮した、アシスタントとしての役割に彼を専心させることになる。

He valued his payments to her (Ida) because Helen had returned to night college in the fall, and if he didn't give the ninety to Ida, Helen wouldn't have enough for her own needs. ⁽⁴⁴⁾

自己変革を遂げたフランクにとって与えるという行為は、もはや何かを諦めたり、奪われたり、犠牲にしたりする行為ではなくなっている。彼の性格は完全に、搾取的段階からも受容的段階からも脱却したものとされている。彼が与えるのは、交換のためではなくなっている。したがって与えることは、彼にとつては自分が貧しくなることではなく、自らが所有する力の表現となっている。与えることによって彼の魂に、自らの強さ・豊かさ・力・生命力を自覚体験させている。〈豊富に所有している人が裕福な人ではなく、豊富に与えることのできる人こそが裕福な人なのである〉と、作者は主張しているのである。この小説でも裕福なのは、小説の最後で最もみすばらしい、下着まですべて全身にほろを纏ったフランクなのである。

与えるもののうち最も重要なものは物質ではなく、自らの心の中にあるものである。自らの生き方、自らの価値観、自らの世界観、自らの喜びと悲しみなど、自らの生の根本を成しているものである。これらを与えることによって相手を富ませ、豊かな生き方に導くこと、これが与えるという行為における理想であろう。これは愛することによって相手を愛する人となす、というマラマッドの理想の表明であろう。この地点においてマラマッドはまさにオプティミストであるが、オプティミストでないかぎりユートピアを指向することなどできるはずはないのだ。マラマッドが主張する教育の重要性とそれへの期待も、このオプティミズムより発する理想の一形態なのである。

モリスは豊かに愛する能力を一つ欠いていたため、与える喜びを制限されている人物とされ、家族に望むものを十分に与えることができない苦しみにもだえたり、最後には自らを貶める行為に陥らざるを得なくなる人物として描かれてはいるが、彼はフランクに最も重要なものを与えたという点から、かなり豊かな人間として描かれていることになる。モリスはまったくのところ、フランクに、人間としての生き方を教えた人物であり、ヘレンと共にフランクに自己変革の契機を与えた人物の一人となっているからである。

異邦人・異教徒だから愛さない、というのは、その対象によって愛は左右されるという考えに基づいたもので、これはマラマッドの愛の理想に反する考えである。フランクを教導する役目を負わされたモリスは、したがって、多くの人たちに愛情を向け、そしてその人たちに愛されていることになる。自分と宗教を異にする異邦人の行商人たちも彼の店で親切を受け、身心を暖めて立ち去っていく。作者はここにおいても、愛は対象によって発露するものではないということ、愛はその人間の人を愛する能力なのだということを示しているわけだが、モリスのこういう愛の表現をフランクが引き継ぐのは当然であろう。フランクが毎朝六時に、たった三セントのパンを買いに来るポーランドの女のために店を開けてやる行為や、借金を返却してもらいにたずねた家族の困窮した生活を目にして、なげなしの自分の金を与える行為は、モリスの同様の行為の写しとなっている。

実際、フランクはモリスの新しい人間としての再生だ、と作者は言っ

ているようである。埋葬中のモリスの棺の上に落ちて、そこから這い上がるなどという場面を書き加えることによって、作者は、モリスの善なる部分のフランクとなつての復活・再生を強調しているであろう。モリスはこうして、フランクと合体し、欠けたところのない人間として再生することで、抱いて亡命してきたユートピア建設の夢をフランクに託して、役割を終え舞台より退場する。

ヘレンもまた豊かさを所有する人間として描かれている一人である。それが最もはつきりと述べられているのは、小説の中ほどで、フランクを愛していると意識しはじめた場面である――

She (Helen) wanted him to become what he might, and conceived a plan to support him through college. Maybe she could even see him through a master's degree, once he knew what he wanted to do.⁽⁴⁹⁾

こうして作者は、小説の中ばに、ヘレンが豊かに与える人間であることを示したあとで、彼女の自らの「内なるゲットー」への逃亡・監禁を描くことになるのだが、再度フランクとの愛が再開すれば、彼女が豊かに与える人と成り得る人間であり、したがってフランクのと後に続いて真の愛を所有する理想的な人間となることを暗示していることになる。

小説の終りに近い場面で、フランクは木の花を彫ってヘレンに贈るが、生きた花ではなく木の花であるのは、フランクのヘレンに対する謎かけ

の行為なのであろう——あなたはかたくなさゆえに硬直した花で、生きた花ではありませんよ、生きた花になりましょう、という。ヘレンがゴミ箱に棄てたこの花を、幻想の中でフランクが拾い上げて、空中に抛り上げると本物の花になるといえるのは、フランクの聖フランシスとの融合・合体の希求を夢みた描写なのであろうか。それとも自分は聖フランシスとの合体を果たしたのだから、木の花の身分に留まるヘレンを生きた花に再生させ咲かせることができるのだ、という自信と、それへの決意の表明として描かれているのであろうか。

社会の中に生きていく限り、人間はひとりでは生きることができない。直接的にせよ、間接的にせよ、みな他人との関わりの中に生きている。そこに疎外が生まれ、差別が生じる素地がある。もし人間が心に真の愛を所有し、お互いに助け合って生きることができたら、疎外も差別も社会から消滅させることができる。そういう理想的な社会をつくり、維持するためには、誰れかが助けを必要としている人間のアシスタントにならねばならない。しかしひとり人間の人間がいつも他の人間のアシスタントであることはない。立場は交互に逆転するものである。つまりマラマッドは、人間はすべてお互いに愛によるアシスタント⇨アシスタントの関係にならなくてはならないという、古いが永久に新しくもある善の哲学を説いているのであり、そういう愛の能力を成熟させるための厳しい条件と鍛錬について語っているのである。

愛を愛とのみ交換できるような人間に性格的に自らを成長させること、

これがこの世界をユートピアに近づけるために最も重要かつ不可欠の条件で、それを達成した人間がお互いにアシスタント⇨アシスタントの関係を打ち建てたとき、はじめてこの世界が疎外と差別のない平和な世界、つまりユートピアとなる、というのである。口でいうは易く実現するに難しい主張である。物質とサーヴィスの交換を、すべての価値判断の尺度とする現代の資本主義の社会では忘却してしまっている理想だが、決して忘却してはならないのだ、とこの作品で説いているのである。

注

- (1) Malamud, Bernard, *The Assistant* (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1957), p. 145. ("How could you kiss a goy?")
- (2) *Ibid.*, p. 6. (from a German he wanted no favors.)
- (3) *Ibid.*, p. 77. (the store had improved not because this cellar dweller was a magician, but he was not Jewish.)
- (4) *Ibid.*, p. 92.
- (5) *Ibid.*, p. 63. (...she didn't look Jewish, which was all to the good.)
- (6) *Ibid.*, p. 59. (...he felt ... repugnance ... for himself because he had never lived this close to Jews before.)
- (7) *Ibid.*, p. 70. (I held him up because he was a Jew. What the hell are they to me so that I gave them credit for it?)
- (8) *Ibid.*, p. 121.
- (9) *Ibid.*, p. 94.
- (10) *Ibid.*, p. 130. (...she fought an old distrust of the broken-faced stranger, without success.)
- (11) *Ibid.*, p. 131. (Yet at the moment of sweetest joy she felt again the presence of doubt, almost a touch of illness.)
- (12) *Ibid.*, p. 136. ("I'll have to wait till I am really sure I love you.")

- (13) Ibid., p. 131. (The fault was her.) (38) Ibid., p. 234. ("Things are changed. I am not the same guy I was.")
- (14) Ibid., p. 132. (39) Ibid., p. 243.
- (15) Ibid., p. 132. (thus she settled it for herself yet was dissatisfied for those for whom she hadn't settled it.) (40) Ibid., p. 243.
- (16) Ibid., p. 133. (yet she could not help but hope her own children would someday marry Jews.) (41) Ibid., p. 243. ("You owe us nothing.")
- (17) Ibid., p. 132. (42) Ibid., p. 237.
- (18) Ibid., p. 168. (43) Ibid., p. 235.
- (19) Ibid., p. 165. (...she had something important to say, nothing less than that she now knew she loved him, surely he would want to hear what.) (44) Ibid., p. 241.
- (20) Ibid., p. 167. (45) Ibid., p. 133.
- (21) Ibid., p. 168.
- (22) Ibid., p. 26. ("Your Jew ass is bad.")
- (23) Ibid., p. 244. ("You bitch," Nat called after her.)
- (24) Ibid., p. 239.
- (25) Ibid., p. 14.
- (26) Ibid., p. 13.
- (27) Ibid., p. 104. (She respected him for it.)
- (28) Ibid., p. 106. (...wanting to know more the more he knew, in this way growing in value to himself and others.)
- (29) Ibid., p. 130. (She felt she had changed him and this affected her.)
- (30) Ibid., p. 130. (She had, she thought, changed in changing him.)
- (31) Ibid., p. 133.
- (32) Ibid., p. 62. (His desire grew to get to know her.)
- (33) Ibid., p. 63.
- (34) Ibid., p. 43.
- (35) Ibid., p. 43.
- (36) Ibid., p. 121. (He sometimes appeared to be more than he was, sometimes less.)
- (37) Ibid., p. 97.